



okumikawaAwake

愛知 奥三河
新城 設楽 東栄 豊郷

心の美と健康が目覚める、
新しい旅の目的地は、定着の場へ。

#奥三河で暮らす

愛知の山里を旅し、そこへ定着する理由。

Irene 著

一般社団法人 奥三河観光協議会 編



奥三河で暮らす

愛知の山里を旅し、そこへ定着する理由。

Irene 著

一般社団法人 奥三河観光協議会 編



長野と静岡の県境に接する愛知の山里、奥三河。平安時代に荘園がこの地域に開墾されて以降、長い歴史に裏打ちされた伝統が根付いた山深い集落も、実は名古屋から車で2時間とかからずに着いてしまう身近な秘境。

ドイツと愛知県にルーツを持つイレーネが、ヨーロッパでの留学生活を経て出会ったこの地域へ、気がついたら通い続けて15年以上の年月の中で邂逅を果たした、奥三河で暮らす、年齢も出身も違う4人の奥三河人奇譚集。

目次

Just because. なんか、いいんだよね。 04

有城 辰徳・新城市 08

杉浦 篤・設楽町 14

大岡 千紘・東栄町 20

熊谷 仁志と青山 幸一・豊根村 26

【特別寄稿】荻野 孝子・地域と世代を繋ぐ架け橋に 32

愛知の山里を旅し、その先にある暮らしへ——奥三河—— 34

奥三河基本情報 38

奥三河四市町村移住関連窓口情報とメモ欄 39

Just because. なんか、いいんだよね。

初めて奥三河に旅をしてから、もう十五年以上の年月がたちました。こつぱずかしい程の熱意で「自分探しの旅」に夢中になっていた学生時代。カーナビのついていないレンタカーに乗り込み、ちょっぴり不安な気持ちで何度も地図を確認しながら細い山道を進んで東栄町、布川の花祭を目指した時のドキドキ感が、昨日のここのように思い出されます。やっとたどり着いた時の達成感と言ったら、ああ青春の一ページ！

いつしかそのレンタカーは、最新式のカーナビのついた自家用車に取って代わりました。最初は「奥」と言うだけあってやっぱり遠いなあ！なんて思っていたアクセスも、時代と共にどんどん便利になったものです。今のわたしは、地図なんか見なくなつてへっちゃら。「今日はどのルートで行こうかな」と、旅路を楽しむことも出来るようになりました。通えば通うほど身近に感じられるようになり、そしてますます好きになっていきます。

何故わたしはこんなに長い間、この地に旅を続けているのでしょうか。奥三河を好きな理由を聞かれることがよくあるのだけれど、実はこの質問がなかなか難しい。何故

だか、上手く言葉でその理由を表現することが出来なかったりします。

もちろん脳裏には大好きな景色や音、香り、味の記憶が、いくらでも浮かんできます。暑い夏のある日、家族で遊んだ大千瀬川の水がとつても冷たくて生き返るような気持ちになったこと。真冬には、かすかに聴こえてくる花祭の太鼓や掛け声が心地よくて、ウトウトしてしまいそうになった。ブナの原生林を歩けば落ち葉がフカフカの絨毯みたいではしゃいでしまったことや、一人でのんびり浸かっていると、「どっからきたのん」と声をかけられる率高めの、山あいの日帰り温泉の絶妙な湯加減。あとはそうね、美味しいもの？何もかも！とても！美味しいの！寒い寒い冬の夜に地元の人に食べさせてもらった、なんてことはないブリ大根。冷え切った身体に染み渡って、涙が出そうに美味しかったなあ。

でもいざ「奥三河のどんなところが具体的に好きなの？」と聞かれると口ごもります。自然が豊かだから、だとかお祭りの伝統文化が素晴らしいからとか、もちろんそれもそうなんですけど、でもそういうことじゃない。うーん、どんなところと言われても、理屈ではなくただ凄く好きなんだもん…。言葉に出来ない、いやむしろ言葉にしたくないような不思議な気持ち。

上手く言えないんだけど、ゆるぎなく、間違いなく、自分にしっくりきている場所。そしてきつと、その答えを見つけたくて、また何度でも旅に出かけるのだと思います。それなのに後ろ髪引かれながら帰路に着く頃には、結局また「ああやっぱり大好きだなあ！」という幼稚な表現になってしまう！困ったものです。

ただ、居心地がよい。ただ、凄く好き。

自然体に楽しむ自分が、なんだか嫌いじゃないのですよね。

いや、良く考えたらそんな自分も含めての奥三河こそが好きなのかもしれません。だから、またすぐに行きたくなる。いや、帰りたくなる。

もう、行く場所なのか帰る場所なのかすら、良く分からなくなっちゃった！
そんな理由じゃ、だめかな？

今回は、紆余曲折を経て奥三河を定住の地とした四組の皆さんにお話を聞いてみることにしました。「奥三河で暮らす」までの経緯や今の思い、これからのことなどを語って頂くうちに、なんとなく分かってきたことがあります。それは、実は皆わたしと同じ、

旅の途中だということ。自分にとって居心地の良い場所ってなんだろう？各々が、それぞれの答えを探しながらこの地にたどり着きました。ここが旅の終着点なのかは誰にも分からないけれど、今この瞬間、ここで暮らしていることは多分正解で、そんな自分は幸せなんだと思う。ここにたどり着くまでの境遇も価値観も全く違う四組なのに、「自分に正直に、心地よく生きることが大切なんだよ」と、口を揃えて教えてくれたのには本当にハッとさせられました。

いつまでもこの地に魅せられ、旅をする人がいる。

いつか暮らすようになる人がいる。

美しい故郷の景色を胸に、町を離れる人もいる。

そしてまた帰ってくる人がいる。

色々な人が暮らす場所。それもひとつの、奥三河の良さなのではないでしょうか。

Just because. 大好きな奥三河。

だって、なんか、いいんだもん。

ある日の奥三河へ、旅立ちの前に。 イレーネ



有城 辰徳

一般社団法人

タモンデ・代表理事

〈新城市〉



写真：鈴木真由子

有城辰徳 新城市

奥三河を知りたかったら、やっぱりまず奥三河の人と少し話をしてみると良い。わたしはそんな風に思います。ちょっとした挨拶、他愛も無い会話。時には思いがけず深い話に発展したり。そんな時間の中で、不思議とその地域の良さがじんわりと伝わってきます。今回の旅は、奥三河に暮らしながらコミュニケーションの大切さを誰よりも実感している有城辰徳さんを訪ねる所から始まりました。

新城市に暮らす有城さんの特技は語学が堪能なこと。外国語？方言？いえいえ！地元の人々がそれぞれの地位や立場によって話す様々な「コトバ」のことです。地元の人々の「コトバ」に、行政の「コトバ」、そして奥三河へ遊びに来る訪問者の「コトバ」。同じ日本語を話していても、価値観の違いからお互いを理解し合えず、話が通じなくなってしまう。誰もが経験したことのある人間関係のもどかしさですが、有城さんはご自身の今の役割について、こんな風に表現してくれました。

「僕はそんな多様な人たちの言葉を通訳して、繋げて、地域コミュニティのエンジンを通していく橋渡しみたいな存在……だといいなと思います」

もともと新城出身でありながら高校卒業後に地元を離れてオーストラリアへ留学。その後国内でのカメラマンとしての活動などを経て、彼が地域おこし協力隊として帰ってきたのは二〇一四年のことでした。それまで心の赴くままに色々な土地で暮らしながらも、なかなか本当の居場所というものは見つけれなかったと話す有城さん。二十年程度離れていた地元への帰郷のきっかけは？「帰りたいというよりも、もうどこにもいられなくて帰るくらいしか選択肢がなかったんですね。人間関係も上手く行かなくて」と、少し苦笑いしながら教えてくれました。けれど同時に、戻るまでの長い年月と経験こそが未熟だった自分の生き方を整え、生活の心地よいペースを掴み、社会での役割を見つけるのに必要な時間だったんだと強く実感しているそうです。

地元で働き始めた有城さんが初年度に直面したのが、まさにこの「コトバ」の違いにより生まれるコミュニケーションの違和感や摩擦でした。自由気ままな過去の自分であれば、相手の環境や立場を省みずに「どうしてこうしないんですか？」と言いたいことを言い、その場を去って終わっていたのかもしれない。でも、これまで様々なコミュニケーションで暮らし、その度に多様な価値観を目の当たりにしてきた有城さんは、次第にそれぞれの話に丁寧な耳を傾け、バランスを取るこの大切さに気付くようになります。

「地域おこし協力隊の一員として地域コミュニティに関わるようになり、自分の中に公共性・社会性という考え方が生まれたんです。今までは『個』として赴くままに生きてきたけれど、それが出来ない人もいる。皆がいい塩梅で合意出来るアイデアを出していくためには、社会との繋がりがって大切なんだなって。三十代半ばになり初めて責任感が生まれました」

そんな気付きから誕生したのが、今では新都市の風物詩となった《DA MONDE TRAIL》。誰もが気軽にチャレンジしてみることの出来る、地域のためのトレイルランニングの大会です。更に現在はカフェ《ヤングキャッスル》をオープンさせ、スポーツをきっかけに新城を訪れた人が奥三河でもっと交流を深めることの出来る拠点となるような、コミュニティスペース作りを目指しています。

「最初は大会ごとに高熱を出して寝込むくらい全部一人で背負っていたんです。でも意見を共有しあうことによって、支えてくれる人たちが流動的に動き、今では何も言わなくてもお互いにサポート出来るようになってきた。もちろん妻の存在も大きいと思います。自分がいなくてもイベントが回っている様子を目の当たりにして、やっとここで



©Kikuzo



僕が担う通訳者としての役割に納得出来た気がします」

毎回参加してくれる地元の子供たちの成長が何よりの喜びだと目を細める姿はとても優しげ。そして若い頃には人に上手く伝えられなかったという地元の話やその魅力も、「今なら沢山話したいですよー」と笑います。

他者の言い分に耳を傾け、自分の考えとの折り合いをつけてみる。社会との繋がりの中に、自分の納得を見つける。「移り住む人がいきなり初めから、地元の様々な言葉を理解することは難しいかもしれないけれど、間に入ってくれる頼れる存在をぜひ見つけてほしい。そして自分の

身近な所だけでなく、もう一歩踏み込んでコミュニティを作る楽しさを知ってください」
そうだ、奥三河に来て誰かと話をするなら、まずこんな人と話してみるといい。そんな気がしました。

有城（山田）辰徳 ありしろ・たつのり

一九七六年生まれ 愛知県新城市出身 豊川高校卒 高校を卒業し、オーストラリアに留学。帰国後は北海道、東京などで暮らす。二〇一四年四月、新城市地域おこし協力隊として地元へUターン。在任中に「まずは挑戦！ 楽しむところから」をコンセプトとしたトレイルランニングレース DA MONDE TRAIL を立ち上げる。地元と外部を繋げ、大会を支える側も参加する側も、誰でも楽しめる大会へと育てる。任期終了後、一般社団法人ダモンデを設立。スポーツ事業だけでなく、観光、まちづくり、大学連携など活動の幅を広げている。二〇一九年には新たに「ひと・もの・こと」の交流拠点として市内に『ヤングキャッスル』をオープン。内閣府地域活性化伝道師。



杉浦 篤 山の搾油所・代表
〈設楽町〉



写真：有城辰徳

杉浦篤 設楽町

自分にとっての「幸せ」をイメージした時、思いつくのは何でしょうか。理想の仕事や、送りたいライフスタイル、暮らしたい場所、一緒にいたい人……。では、健やかな心と身体はどうでしょう。すごくシンプルで、でも一番忘れてはいけない大切なこと。二〇一五年から設楽町田峯地区に暮らす杉浦篤さんは、奥三河でそんなシンプルな幸せを日々確かめています。

初めてお会いした杉浦さんは、とても朗らかで健康的。地域おこし協力隊としてお茶の実を搾って作るスキンケアオイルの開発事業をスタートさせ、現在独立して四年目の商品、《設楽茶油》のおかげでしょうか？日々の畑仕事でよく焼けた肌もツヤツヤしています。「昔からの友達は、今の私の姿を見て本当に驚いているんです。最近はずいぶん狩猟免許まで取っちゃいました！こんなこと、自分でもびっくりですよ！」と楽しそうに笑いながら初めてワナにかかった獲物について語る様子からは、移住前に苦労されていた姿は全く想像が出来ません。

15 「私は本当に個人的な理由でここに暮らすことになったんです。植物の研究者をして

いましたが、化学物質過敏症を患い、街に暮らすことが出来なくなりました。ひどい時は寝たきりに近い状態で、呼吸も苦しいし身体を動かすのもつらい。だからどこに住みたいというよりも、とにかく自分が生きていける場所、住んでも症状が悪化しない場所、ということだけを考えていた。そうしたらたどり着いたのが設楽だったわけです」

山に來れば、息が出来て、歩けるし、走れる。そして心までなんとなくポジティブになれる。移住の決め手になったのは、そんなシンプルな身体の反応でした。全く知らない土地での暮らしに当然不安や緊張はありましたが、地元の方々が初日から声をかけてくれたのが、本当に嬉しかったそう。特に移住検討時よりケアをしてくださっている加藤博俊さんの存在は大きく、偶然同じ田峯地区に暮らしていることもあって有り難いと話します。

「いやあ、そりゃあ最初の頃は、一日の終わりにほっと疲れていましたよ。でも不思議とご飯は良く食べ、夜は本当にぐっすり良く眠り、朝にはダメージが抜けて新しい一日を始められたんです。街にいた頃には寝ることすらしんどくて、出来なかった。こうした身体の変化は、移り住んだ初期から感じる事が出来ました」

次第に健康を取り戻し心の余裕も生まれた杉浦さんは、徐々に地元のお祭りや消防団

などの地域コミュニティにも関わるようになっていきます。二百人ほどが暮らす田峯地区は、設楽町の中でも特に伝統的なしきたりや地域行事などが多く住民同士の繋がりの深いエリアですが、何もかもが新しい経験だった杉浦さんにとっては負担には感じられなかったんだそう。「分からないので教えてください！と言えば受け入れてもらえるものなんですよね。だから是非地元の人とは積極的に対話して、移住する前にもコミュニケーションをとると良いと思います」と、地域に溶け込むコツを教えてくださいました。

当初目指していた「自分の体調を大切にしながら長く暮らしていけること」という目標は、無事叶いました。けれど、移住前から大きく変わったのはご自身の体調だけではありません。最初に一人で移り住んだ家に、今では奥三河で知り合った奥さまと、小さな息子さんも一緒に暮らしています。

「田舎での子育ては大変なのかもしれないけれど、でも他の場所を知らないですからね。妻とは移住者同士、不安なことは何でも解消出来るよう、いつも色々なことを話合っています。息子はせっかく設楽で生まれた子供だから、ここでの体験を大切にして





ほしい。そして自分もここで長く健康的に暮らしていきたいです」

そんな杉浦さんに一番好きな奥三河の風景は？と聞いてみると「家族三人で気兼ねなく近所を散歩している時に見る何気ない景色ですかねえ」と答えてくれました。職場と家の往復で季節を感じることもなかった都会での暮らしと違い、設楽町での暮らしは四季の移り変わりと共にあります。虫たちや鹿の鳴き声、山菜、伝統のお祭り、地域の行事…。不便さがない訳ではもちろんないけれど、何より大切な家族と健康に過ごせる日々の営みを、幸せに感じているのが伝わってきます。

「コロナ禍でお祭りが出来なくなったの

が寂しくてね。今年は歌舞伎出来ないなんて不思議な感じ。私はまだまだ下手で稽古でも苦戦しているんですが、いずれ息子にも出てほしいなと思います」そう語る杉浦さんはすっかり、もう羨ましいほどに、設楽の人、田峯の人、地元の人の顔をしていました。

杉浦 篤　すぎうら・あつし

一九八四年生まれ 愛知県出身 鳥取大学卒 鳥取大学大学院修士課程修了 総合研究大学院大学博士課程単位取得満期退学 二〇一五年四月 設楽町地域おこし協力隊に入職。アトピー性皮膚炎、化学物質過敏症、元・植物研究者という経験から、設楽町産の茶種子から搾ったスキンケアオイル『設楽茶油』を開発。二〇一八年四月『山の搾油所』を設立。きめ細やかな品質管理のために、原料の収穫、製造、販売まで全てを一貫して行う。



大岡 千紘

nao
ファウンダー

(株)もと代表取締役

〈東栄町〉



写真：有城辰徳

大岡千紘 東栄町

大岡千紘さんに初めて会ったのは二〇一五年のこと。東栄町で手作りコスメ体験《naori®》を立ち上げたばかりの若い彼女には、地域おこし協力隊としての成果をあげることにの情熱とパワーがみなぎっていました。「そりやもう当時は超ギラギラしてました！」と本人も冗談まじりに話すほど、その圧倒されそうなほどの熱意が印象的だったのをよく覚えています。

月日は流れ、結婚した今も東栄町に暮らす大岡さんを訪ねました。二年前に生まれた娘さんが教室で元気に遊ぶのを笑顔で見つめる彼女の横顔は、当時とは少し変わったように感じられます。昔の大岡さんを知る人は口を揃えて「ちーちゃん本当に表情がやわらかくなったよね！」と言い、そんな言葉に照れ笑いする様子はとても穏やか。どんな心境の変化があったのか？改めて東栄に移住したきっかけから聞いてみました。

「大学在学中に神楽や祭りが好きになりました。全国の祭りを見て回るうちに過疎で多くの祭りが存続の危機にあることを知り、いずれはどこかの過疎地域の役に立つような活動がしたいと思うようになったんです。そんな時に偶然訪れたのが東栄町、中設楽

の花祭。そしてその一ヵ月後に東京で地域おこし協力隊の募集説明会があり、会場で一番最初に声をかけてくれたのが偶然にも東栄の方でした」

当初、移住先を別の自治体と迷っていた大岡さん。東栄町を選ぶ決め手となったのは、町民の方々の人懐こさと温かさでした。「花祭でも説明会のブースでも、とにかくもうぐいぐい積極的に話しかけてくれるんですよ！『あんだ、どこからきたん？』て。他の地域ではあまり感じたことのないノリでしたね」と笑います。でも、人懐こいのは彼女も同じ。東栄に住んだ初年度の仕事は、とにかく町の人を知ること！持ち前の積極性とフットワークの軽さで沢山のひと繋がりを持ち、同時に自分のことも知ってもらうというミッションに徹したそうです。良い仕事仲間にも恵まれ、とてもスムーズに新しい暮らしに馴染むことが出来たと振り返ります。

朗らかな大岡さんが壁にぶつかったのは、移住して二年目のこと。「それぞれが東栄町で自由にやりたい事業を」という協力隊の新たな方針が打ち出された時、逆に何をすればよいのかと途方に暮れてしまいます。「大学を卒業してすぐに、ただ漠然と地域おこしで一旗上げてやろう！」と町に飛び込んだんですよ。突然、スキルのない自分の無力さを痛感してしまった瞬間でした」

そんな頃に出会ったのが、東栄町でファンデーションの原料となるセリサイトを産出する三信鉱工株式会社の三崎社長です。手作りコスメの体験をやりたいという三崎社長の想いを聞いた彼女は、やっと自身の町での役割に気付くのです。自分にはアイデアがなかったけれど、東栄に住む人の持っているアイデアを代わりに形にしていくことなら出来る。その気付きは見事に花開き、東栄町は彼女の手がける naori. により国内外から一躍注目される存在に。そして彼女自身にとっても、この町に居場所を見つけるきっかけとなっていきます。

「もっと広い世界を見にまた外へ出た方が良いんじゃないか、なんて長い間ずっと思っていました。でもよく考えてみればやっぱり東栄町だったんですね。結婚して苗字が変わり家が出来て、少しずつこの町がわたしの居場所なんだと実感するようになりました。地域に馴染むこと自体が仕事だったから気付くのに凄く時間がかかったけれど、今は自分らしく、日々の生活を中心とした理想の暮らしをしている気がします」

東栄町で働き始めた頃、協力隊の担当者の方はいつも大岡さんに「地域のためではなく自分のやりたいことを見つけてほしい」とアドバイスをしていたそう。やりたいこと





をやれば、それが必ず東栄町のためになるから、と。今、移住者へのアドバイスは？と聞くと、少し考えた彼女は同じようにこう答えました。

「移住してみると、どうしても色々な期待をされることもあるかもしれません。人口の少ない小さな町では一人にかかる負担やしがらみも大きくて、何か貢献しなければというプレッシャーを感じがち。でもそうではないんです。それぞれが、自分のしたいことや好きなことを大切にしてほしいと思います。地域のためだけを考えていると、だんだんしんどくなるもの。自分を大切にしておその地域だと思っています」

やりたいことを楽しく出来る町こそが

「良い町」だし、そんな町にこれからも暮らし続けたい…。そう和やかに語る大岡さんの住む東栄町が、わたしもとても好きだな、と思いました。

「naori（登録 6040684 号）」および「ビューティーツーリズム（登録 6040687 号）」は、東栄町の登録商標です。

大岡（内藤）千紘 おおおか・ちひろ

一九九一年生まれ 和歌山県出身 京都造形芸術大学（現 瓜生山学園京都芸術大学）卒

二〇一三年四月、東栄町地域おこし協力隊に入職。二〇一五年六月、三信鉱工（株）が採掘するファンデーションの原料となるセリサイト（絹雲母）を活用した手作りコスメ体験事業として、『naori.／なおり』を開始。『ビューティーツーリズム』を提唱。東栄町観光まちづくり協会にも関わり、メインコーディネーターとして観光全般に関わった後、三信鉱工（株）と共に二〇二一年六月『株式会社もと』を設立、代表取締役就任。naori.ファウンダー。内閣府地域活性化伝道師。



熊谷 仁志（株）トヨネフィッシュファーマーズ 代表取締役（豊根村）



写真：有城辰徳

熊谷仁志と青山幸一 豊根村

最後に訪れた豊根村でわたしを迎えてくれたのは、豊根に生まれ育った熊谷仁志さん、そして豊根村役場の青山幸一さんです。《株式会社トヨネフィッシュファーマーズ》代表の熊谷さんは少年のような瞳の輝きを持つ寡黙な方。そして青山さんも、今や村の特産品となったチョウザメの大切な仕掛け人。「三大珍味を特産品にしたら面白そうだな。キャビアをどんぶりで食べるか!」という冗談から始まったチョウザメ事業がスタートしてから約十年が経とうとする今、お二人に豊根での暮らしについて伺いました。

「豊根の水や空気、豊かな自然が良いって色んな人に言われるけど、僕からしたらずっと当たり前のものとして暮らしてきたもん。それ以上に思ったことがなかったですよ」と、なんとも羨ましいことをおっしゃるのは熊谷さん。また茶臼山高原の星空やみどり湖の水面など、豊根のおススメスポットを聞いてみると次々と魅力的な場所が飛び出しますが、青山さんが個人的に一番好きな豊根での時間は、自宅の裏山の森でたずむことだそう。「森の中に色んな植物があるのを見たり、農作業の合間に行って少し休んだり。特別なことではなく、そういう時間を過ごせるのが良いですね」ほら、やっ

ぱりとっても羨ましい！非日常ではなく、日々の仕事や生活の中心に豊根の自然がある。移住者の皆さんにも、そんな自然を活かした暮らしを実現して欲しい。そんな願いがあるそうです。

チウザメの養殖は決して簡単なものではありません。年月もかかるこの事業に、熊谷さんは何故チャレンジしようと思ったのでしょうか？「難しいけれど、誰でも出来ることだったら誰かがやれば良いじゃない？難しいからこそ面白いことをやりたかったんです」笑いながらそう話しますが、その原動力は「生まれ育った地元への恩返し」という強い気持ち。「やつぱりわざわざ豊根に来て食べてもらわなくちゃね。そうすれば豊根だけでなく東三河全体が賑やかになりますから」

和やかに、けれど熱く語るその姿はこれまで多くの地域住民に希望と勇気を与えてきました。その一人が、道の駅で料理や特産品を提供する石田いままんです。熊谷さんの幼馴染でもある石田さんは、チウザメ事業の話聞いた当時の心境をこう振り返ります。「村のために頑張るという気持ちがとっても嬉しくってワクワクして、ぜひ応援しようと思いました。そして私も豊根には他にどんなものがあるかなと考えるようになったんです。子供の頃食べた懐かしい鮎やアマゴのお茶漬け……。昔ながらの故郷の味が消

えてしまわないように、若い人にも覚えてもらいたいな、なんて」そんなメニューの開発にも一役買っているのが、頼りになる熊谷さん！現在お茶漬け用の鮎の養殖、そして加工まで協力しているそう。「なんてったって僕は美食家ですからね、味にはうるさいんですよ」豊根で生まれ育ったお二人のやり取りがとても微笑ましく、またも羨ましくなっていました。

熊谷さんが話す地元への恩返しというのは、決して漠然とした想いではありません。大自然の中で一緒に遊んだ幼馴染。声をかければいつでも手伝ってくれる仲間や、ズバツと正直な助言をくれる友人たち。ひとりひとりの顔がはっきり見えているのでしょ。う。コロナ禍以前には毎週末のように自ら鰻や肉を焼き、地元の皆さんへ振舞っていたんだとか。「長い付き合いの人ばかりですよ。仲間がいることが、一番大切ですよね」

移住者が苦労すると言われがちな、地域での人付き合いのコツを聞いてみました。「大したことないんですよ。例えば近所の人がどんぶりに煮物を持ってきてくれたら、そのどんぶりが空くでしょ。だから何か入れて返す、とかね。それだけのことです」そう笑顔で答える熊谷さんの言葉を聞き、三十年以上前に自身も豊根に移住した青山さんから





青山幸一（豊根村役場）

も、こんなアドバイス。「もし分からないことがあれば、早めに聞けば良いんです。そうすれば、必ず教えてくれる。次にまた聞くと、熊谷さんなんかはすぐに、じゃあ次は飲みに来るかと言ってくれる。そうすると、どんどん行きやすくなります。自分の常識にとらわれず、『ここではどうなのかな』と、まず関わってみることが大切だと思います」

最後に十年後どうしたいか？と熊谷さんに聞いてみると、返ってきたのは意外過ぎる答えでした。

「十年後にはそろそろ引退してますかね。そうしないと海外旅行、行けないですから！」

「そうですね、じゃあ皆で行きますか!？」

「え、だったら私たちも!」

大笑いしながら話す皆さんの和気藹々とした雰囲気こそが、豊根の特産品。次にお会いしたら、絶対にそう伝えるつもりでいます。

熊谷 仁志くまがい・ひとし

一九五九年生まれ 愛知県豊根村在住 家業の常盤運送を受け継ぎ、運送業を営んできたが、ライフワークとして行っていたアマゴ養殖経験を活かして、二〇一二年チヨウザメ養殖実証事業を仲間とともに開始。二〇一四年には豊根村でのチヨウザメ養殖技術を確立し、本格的な養殖を展開。二〇一六年度から豊根村の新しい特産品として現在、村内五か所の飲食店にチヨウザメ魚肉を供給している。二〇一九年『株式会社トヨネフィッシュファーマーズ』を設立、代表取締役就任。チヨウザメのほか、子持ちアユやアマゴ養殖・販売も手掛けるとともに、新しい豊根村の特産品となるキャビアの生産を目指している。



萩野 孝子

つくしんぼうの会・代表

（JA愛知東助け合い組織）

写真：鈴木真由子

【特別寄稿】 荻野孝子 地域と世代を繋ぐ架け橋に （聞き手 鈴木真由子）

J A愛知東の助け合い組織《つくしんぼうの会》では、奥三河の豊かな自然が育んだ、滋味あふれる食材をふんだんに使い、身体の内側から美しくなれるような美味しい商品を、全て手作りでお届けしています。私たちが商品を作るときに大切にしていることは、様々な方と「対話」をすること。地元の生産者の方から、規格外などで出荷が出来ず廃棄されてしまう農作物についてお話を頂いた時は、「あまりものには福がある！」と、フルーツヴェイネガーやジャムなどの加工品の開発に取り組んできました。また、若い方が、新商品開発についてお話を下さった時には、新しいアイデアに心をときめかせながら協働して参りました。時には地域をめぐりながら、老若男女を問わず様々な方と対話することで自分も知識を得ながら、人と人との関わりによって私たちが磨かれる場となっていると感じています。私たちに声をかけてくだされば、これまで蓄積してきた知恵や技術を出し惜しみしません。私たちがお届けする商品が、地域や世代を繋ぐ架け橋となるように。お互いに手を取り助け合い、真心をこめた良いものを作り伝えていくことが、私たちの「楽しい生きがい」です。



写真：鈴木真由子

愛知の山里を旅し、その先にある暮らしへ――奥三河――

「居心地の良い場所で、豊かな時間を過ごしたい」そういう旅に、奥三河はぴったり。のんびり、暮らすように旅を試みる。そんな言葉がしっくりくる場所です。

旅の拠点は、例えば東栄町の体験型ゲストハウス《danon》。築百五〇年の古民家の玄関をガラガラと開けると、うっかり「ただいまぁ」と声をかけてしまいそうになる程の雰囲気良さ（いや、もう最近はやっているかも！）。実際に長期滞在してしまう人も続出だとか。オーナーの愛ちゃんと皆で作った手料理がずらりと並んだ食卓を囲み、皆で後片付けをし、時にはひよっこり地元の人も顔を出してくれたりして……。面白い人ばかりが集うこの宿で語らっているうちに、いつの間にか夜は更けていきます。

35 「あ、ねえイレーネさん、ついでにこれ渡しておいてもらえますか？」愛ちゃんにお使いを頼まれ翌日向かったのは新城市、鳳来寺山の麓にある旧門谷小学校です。大正時代建てられたレトロな校舎が、廃校となって久しい今も人々を優しく迎えてくれます。



Irene (イレネ)

1982 年愛知県生まれ ロンドン大学ロイヤルホロウェイ校演劇学部卒 仮面劇に魅せられパリのジャック・ルコック国際演劇学校でフィジカルシアターを学んでいた頃、奥三河で花祭の面と出会い、その虜になり帰国を決意。西三河地域で町おこしや地域振興の仕事に携わるうちに、ひょんなことから 2010 年に東海エリアでラジオ DJ / タレントデビュー。



週に三日だけ校庭の一角にオープンする《緑のPASSERJYU》。美味しいパンとコーヒーを購入しベンチに腰掛ければ、やがてそこはふらりと訪れた旅人たちや常連たちの笑い声に満たされ、楽しい井戸端会議のような場所になっていきます。

ああいけない、お使用のこと忘れてた！コーヒーを淹れてくれる寅さんに「これ、愛ちゃんから預かりました」と渡すと、「ありがとう！この間、置き忘れちゃってねえ。助かった助かった」という返事。中身は結局よく分からなかったけれど、なんだかこうしてお使いを頼まれたこと自体が無性に嬉しくて、ついつい長話をしてしまいました。

「またいらっしやいね」の言葉がいつも嬉しい。次はいつ行こうかな？早速そう考えながら帰路に着くのが、また心地よく感じられます。ゆっくり、のんびり、日常のように、非日常を過ごしてみる。そんな旅が、やがていつか、本当に奥三河での暮らしに繋がるのかもしれない。

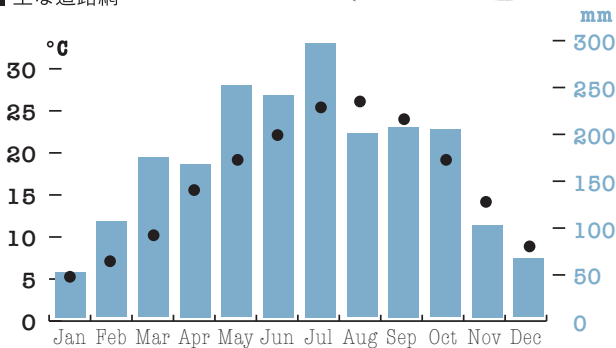
二〇二一年十一月


Tami Inada

奥三河基本情報



奥三河の玄関口、
新城市までの最短所要時間と
主な道路網



新城市月別平均気温・降水量（概算）



新城市役所 企画政策課

新城市字東入船 115 番地

電話番号：0536-23-7620

FAX 番号：536-23-2002

メール：kikaku@city.shinshiro.lg.jp

<https://www.city.shinshiro.lg.jp/soshiki/200/200200/index.html>





設楽町役場 企画ダム対策課移住定住推進室

北設楽郡設楽町田口字辻前 14 番地

電話番号：0536-62-0514

FAX 番号：0536-62-1675

メール：kikaku@town.shitara.lg.jp

<https://www.town.shitara.lg.jp/index.cfm/15,5592,html>





東栄町役場 振興課

北設楽郡東栄町大字本郷字上前畑 25 番地

電話番号：0536-76-0502

FAX 番号：0536-76-1725

メール：shinkou@town.toei.lg.jp

<http://www.town.toei.aichi.jp/ijuu/>





豊根村役場 地域振興課

北設楽郡豊根村下黒川字蕨平 2 番地

電話番号：0536-85-1312

FAX 番号：0536-85-1164

メール：chiikishinko@vill.toyone.lg.jp

<http://www.vill.toyone.aichi.jp/cms/?p=3347>



新型コロナウイルス感染症によるパンデミック発生期間中に写真撮影を行ったものに関しては、日本国政府が推奨する感染防止策に従った上で、緊急事態宣言発出中の移動自粛、マスク着用、対人距離の確保及びワクチン接種の完了したスタッフが参加し、撮影を行っていますが、本書における人物紹介のための演出上、掲載写真内ではマスクを外しています。

okumikawAwake / メザメ奥三河

奥三河で暮らす

2021年12月1日 第1版発行

著者 Irene（イレーネ）

発行者 愛知県

発行所 一般社団法人奥三河観光協議会

〒441-1318 愛知県新城市八束穂字五反田 329-7

道の駅もっくる新城内観光案内所

電話・FAX 0536-29-9393

総合監修 安彦誠一

監修 大岡（内藤）千紘、鈴木真由子

写真 有城（山田）辰徳、鈴木真由子

表紙絵 kondo-maher design

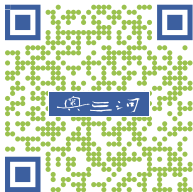
装幀 kondo-maher design

#奥三河は美しい

私の深遠へ、美と健康の旅。



「okumikawAwake/メザメ奥三河」は、愛知県と一般社団法人奥三河観光協議会が推進する、この地域が心の美と健康が目覚める新しい旅の目的地となることを目指すツーリズムブランドです。



発行



愛知県東三河総局新城設案振興事務所